○被害者遺族Ａ氏（女性）（昭和 53 年（当時中学２年生）、父親を交通事故で失う）

［要旨］

後輩たちへの手紙

２年前、出身中学の生徒に向けて手紙を書きました。その中学校で「命の授業」が行われるため、知合いの相談員が出向くということを知り、帰りがけに先生にこの手紙を渡してもらいたいと託しました。

私は、中学２年生の時に父親を亡くしたのですが、私がそうだったように、さまざまな理由で一人親になってしまう子どもたちはいて、そのようなしんどい境遇にいる子が、もし今、その中学校にいるのであれば、その子に届いたらいいなと思って綴ったものでした。

「家族、友達、先生、大人たち。人と関わるって面倒くさいことも多いよね。しんどいことがあるけど、言えずにいること。言ってもしようがないからとあきらめて、ずっと我慢している人はいないですか。家族のためにと思いながら、自分の気持ちを押し込めている人はいませんか。おうみ犯罪被害者支援センターには、一緒に泣いてくれる大人たちがいます。もし誰にも相談できないでいるのなら、思い出してね」という手紙でした。

親からの主観的事実により、誤った世界観を持って子が育つ危険性

あの日も、いつもと変わりない授業風景でした。突然教室のドアが開いたので、生徒たちはみな驚いてそちらを見ました。そこには、「お父さんが事故を起こした。早く帰りなさい」と私にだけ手招きをした先生がいました。

突然遺族になるなんて思いもしなかった。こんなにもあっけなく、それからもあったはずの毎日が消え去るなんて、そんなことも思っていませんでした。どうにもならない境遇、途方のなさに、ぽっとりと振り落とされたような瞬間でした。

交通事故遺児ではない人が大多数の世の中です。友達にそれを言ってみたところで、共感はしづらいだろうし、きっとその後の付き合い方に戸惑ってしまうから、カミングアウトしないほうが安全だ、そんなことを思ってしまう生徒でした。私の遺児としての実感にもし表題をつけるなら、「本心はノーだけど、イエスを押さないと前に進めない人生の書き換え」、そんなふうになるでしょうか。その否応なさは、本当に容赦なかったのです。

父の死にまつわる母の話は、あまりに主観的でした。しかし、13 歳の私には、それが全ての情報でしたから、そのまま理解したものです。「この世は一時も油断がならない。死人の財布にも手を出す人間がいる。役所は冷たい。警察は死者に鞭打つような記事を新聞に書かせる」「叔母さんのせいで、父は亡くなった」。そう思わないとやってられないという憤りが、母親にそのような見方をさせてしまうのでしょうが、子どもには、その真偽を判別する力などありませんから、親から聞いた情報

によって、どうせ、この世の中こんなもの、などと社会に対する誤った認識や先入観を疑う余地なく持って育ってしまう恐れがあります。

私はあえて、「家族復帰」という言い方をしますが、遺された遺族と親子関係を構築し直すことに心を砕く遺児は多いと思います。一家が路頭に迷わず、食べていくことが最優先の毎日の中で、あまりにも弱者の子どもの声はかき消されてしまい、心のサポートは後回しになってしまいます。

事故当時、父 45 歳、母 38 歳、私 13 歳、弟 10 歳でした。父は母方の叔母の用事で車を出し、県内の信号のない十字路で事故。出発直前は後部座席にいた叔母を、父の隣の助手席に座り直すように勧めたのは母でした。事故後、40 年以上経った今も、母はそれを悔やんでいます。

車は、左側面から貨物トラックの衝撃を受け、横転。車外に放り出された父は、意識不明のまま 1 週間後死亡。父の車のブレーキ痕なし。叔母は、大怪我をしましたが、一命を取り留めました。事故現場から父の財布が見つかりませんでした。

母は、地元の新聞に、父の過失による事故と一方的に書かれたことで、警察は公平に物事を取り調べようともせず、新聞記者にそんな情報を平気で書かせた、警察に悪者にされたお父さんがかわいそうと憤りました。市役所は、弱い者に目を向けてくれないところ、申請できたことに気付かなかったら、「残念でしたね、手遅れです」としか言われなかったと、肩を落として帰ってきたこともありました。

母は商売を続けるため、父の死んだ後、すぐ、運転免許を取りましたが、それから 5 年間ほどは、助手席に私や弟を乗せて十字路に差しかかるたびに、左手でうっとうしく払いのける仕草をしながら、「邪魔や邪魔、はよ頭下げなさい。叔母ちゃんの体が大きかったせいで、お父さんは左から来たトラックが見えず、ブレーキが踏めんかったんやで」と神経質に何度も言いました。私は、そのセリフを聞きたくなかったので、十字路に差しかかる手前あたりから、そろそろスタンバイし始めて、犬の伏せのように頭を下げて、車が交差点を通り過ぎるまで待つようになりました。

母は自分の身に降りかかった不幸な出来事を、相手ドライバーのせいに 100%できなかったため、代わりの誰か、つまり叔母のせいにしないと生きてゆけなかったようです。でも私は、叔母を責める気には、どうしてもなれませんでした。なぜなら、どのような理由を後付けしたところで、父は一旦停止の確認を怠り、事故を起こしたことに変わりないこと。そうなると、皮肉にも父が私の人生の書き換えボタンを押して、今の状況に仕向けたと思えるからです。父の墓石の建立者名には、叔母の名前も刻まれています。お墓参りするたびにそれを見てきました。私には、もうそれだけで十分なんです。十分、叔母は苦しんできたと思います。

葬儀は罰ゲーム

病院の父は意識なく、両耳から顎にかけて深い切り傷がありましたが、母や親戚は皆、大丈夫と言

うだけでした。私はその言葉を鵜呑みにするしかありませんでした。だから、「お父さんが亡くなった。今夜はお通夜になる」と唐突に言われても、受け止めきれませんでした。それは、子どもだから言っても仕方がないという大人なりの優しいウソだったのかもしれませんが、父の容態についてきちんと知らされず、私は蚊帳の外に置かれていたのだと認識した時、私は、悲しんで泣けるための感情がわき上がってこなくなりました。

だから、遺族なのに、葬儀の手伝いに来た親戚の人のように、テキパキと振る舞ってしまう。周囲の人の目には、それは気丈な娘に映ったかもしれないけれど、私は人ごとのようにしたかった。この不幸な出来事の主人公は自分ではないと、一瞬でも思いたかったんです。自宅が葬儀会場になるという非日常空間の中で、動かずにじっとしていたら、これから私はどうなるのだろうという得体のしれなさが、心の隙間に何度も入り込んできて仕方がないからでした。

通夜の日は、大きく赤い夕日が出ていました。自宅に戻った父が、鼻に詰め物をした蝋人形のようで、その額はとても冷たく、質感がもはや生き物ではなかった感触は、今もこの掌に残っています。違う次元にいるような錯覚を起こすくらい、無限に続くご詠歌と持鈴の調べの中で、私の思考は次第に麻痺してしまい、このまま明日など来なければいいのにと思っていました。

告別式では、家の道路側のサッシ窓が全部取り外されて、全く笑えないけれど、まるで吉本新喜劇の舞台セットのようだと思いました。仕方なしに連れて来られた感のあるクラスの男子を見て、嫌なら来なくていいのにと思ったり、焼香を待つ参列者が、私たち遺族を指して「かわいそうに」と向ける視線が本当に嫌でうっとうしかったです。今までそんなに話したことのない女の先生たちが近づいてきて、「大変やろうけど、あなたがしっかりして、お母さんを支えてあげてや」と、皆同じことを言いました。遺児にとってその言葉は、「だからあなた自身のことは二の次にしてね。こんな状況だから、仕方がないよね」と同じ意味を持つのです。

「またや。そうやってもっともらしく、あなたの役割はこれが正しい、そうしなさい、みたいな押しつけは止めてほしい。お母さんを支えるばかりで、私はこの先、誰に支えてもらえるの。先生なら、それを教えてよ」。でもうっかり本音を言ってしまったら、「ひねくれた言い方をする、あの子はずいぶん荒れてはるわあ」と言われるのが目に見えていました。後々面倒くさいので、本音は「嫌です、我慢ばかりしたくない」と言いたいけれど、先生が期待する回答「はい」と意思表明するしかありませんでした。

なんで、こんな罰ゲームみたいな目にあっているのかと思うほど、告別式では理不尽な気持ちが込み上げてきて、「絶対、みんなの前で泣いてやるもんか」と思っていました。

葬儀のクライマックスになると、畳の上では親戚のおじさん、おばさんたちが、父のお棺にすがりついて、おいおい泣きながら、菊の花を順に入れていきました。私は目の前の光景に心が引きつっていました。本当はちゃんと悲しんで、静かに父とお別れしたかった。そのどうにもならない残念な気

持ちを抱えながら、望ましい遺族の姿として、お集まりの皆さんに及第点をもらえる菊の入れ方を考えているのでした。

配慮のない先生からの二次被害

先程の葬儀場面での残酷な押しつけもそうですが、学校では、先生による無配慮が無意識にされるので、自身の心と周囲への対処が本当に大変でした。担任の先生たちは、おもむろに名簿を順になぞりだしたかと思うと、「えーと、片親はお前だけやったな」と平気で私を指差ししてきました。私は、「えっ」と固まる。そして先生は何事もなかったように、さっそうと立ち去る。教室内では、男子、女子ともに、やはりの反応で「今まで明るそうに振る舞っていたけど、本当はかわいそうな生い立ちの子やったんやね」みたいな雰囲気に染まっていきました。さっきまで笑っていた友達は、「ごめん、知らんかったわ、今まで」と私に謝ってくる。本当に先生は、何をしてくれるのだろうと思いました。「こんな雰囲気にさせたの、私のせいみたいになっているし。こんな感じに友達に気を遣わせてしまうから、あえてカミングアウトする必要はないと思っていた。今まで言わなかっただけなのに」。

私が母子家庭になったいきさつを知りもしないで、ただ名簿の保護者欄、父親枠が斜線引いてあることだけを見て、平気でこういう毒矢を飛ばしてきました。そういうことは止めてほしいとお願いしたところで、こういうタイプの先生は応用が利きませんから、ちょっと違うシチュエーションになると、また悪気なく繰り返すと思う。「確認して何が悪い」と、先生にまさかの逆ギレされるパターンもありえる。でも私が一番恐れる事態は、私がクラスメートの反応を責める気持ちが一切ないのに、それをホームルームのお題にして、「みんなで、何々さんの立場になって真剣に心情を考えてあげよう」という面倒くさい方向に広げられてしまうことでした。

結局、私はこの件で先生に配慮を求めるのは言うだけムダとあきらめ、刺さった毒矢で心はズキズキするけれど、「少しも痛くないよ、平気です、だから気にしないで」の素振りでしのいできました。

「進路のことは親と相談してきたか」。先生方は、きっとなんの迷いもなく、生徒にそう尋ねられていると思います。遺児が置かれている境遇に少しも目を向けず、両親ともに揃っている生徒と同列にして、「お前もちゃんと相談してきたんやろな」的な念押し口調では、「実はできませんでした」なんて言えるはずもありません。言ったところで、「なんでや」と責められるのがおちですから。そして、「あーあ、こんなふうに聞く先生は、きっとこの先も分かってくれないだろうな」という推察は、たいてい的中するのです。親に将来のことを相談できない遺児もいます。追い詰めるのではなく、「進路のことは親と相談できそうか？」などと、ちゃんと答え方に逃げ道のある聞き方をしてあげてほしい。

私は、親に高校卒業後の話を向けても、「そういう難しい話は、よく分からない。お前に全部任せる。先生と相談して、決まったら教えて」と突き返されていました。同級生のほとんどが、４年制大学に行く流れでした。ネットが普及していなかった当時、同級生と比べて、私には進路選択における情報格差や、未来を描ける選択視野の制限が圧倒的にありました。私はそれを同級生との会話で、否応なく気付かされ、愕然としたものです。

「そんなどうしようもないことに抗うことは、さっさとあきらめてしまおう」。結局、私は、少ない情報と自分に与えられた要件枠内で我が道を行くしかないと早い段階で悟り、中学、高校とも一人で進路を決めて、母には事後報告しました。その時は、遺児の先輩たちにアドバイスを受けることができればどれほど参考になるだろうと思いました。うまくいかなかった、でも失敗してみてこんなふうに考え方を切り換えてやってみたら案外よかった、というような話が聞ければ、参考になったと思います。

心の拠り所となっていた親を亡くすダメージ

弟を溺愛する母の私への口癖は、「お前には思いやりがない」という言葉でした。それを言われてしまうと、私は押し黙るしかなく、「お姉ちゃんやったら、なんで我慢せなあかんの？」と、生前はよく父に言いにいったものです。すると父は穏やかな口調で、「うんうん、お前も頑張ってるのにな」と返答してくれました。私は、ただそれだけで救われていました。

心の拠り所だった父がいなくなったことで、私の足元は一気に揺らぎ始めました。ぐらぐらのマンホールの上から、どこにも踏み出せなくなりました。自ら望んでそうなったわけではない、不合理な日々の中で。

葬儀が終わり、親戚皆が帰ると、家の中は急にひっそり寂しくなりました。自分の部屋にすぐに入ってしまうのも、なんだか違うような、部屋にいてもすぐに呼ばれそうな気もして、なんとなく居間にいました。何事もなかった以前のように日常の会話を交わすのが、すごく白々しい感じ。そのいたたまれなさに、ついテレビをつけました。ピンクレディのピッチングフォーム、「サウスポー」が流れてきました。

何か話さなくてはと思った私は、お父さんが事故にあった場所にお花を供えたい、とつい言ってしまいました。すると、「なんで？ お父さんが痛くて苦しんだ場所に、お前は行きたいんか」と、すぐに母から拒絶されてしまい、私は、「うわあ、しまった」とすぐに後悔しました。今の不用意な発言で、なんて冷たい娘なのだろうと、また思われたかもしれない。父がいない今、母に見捨てられたら私は生きてゆけない。この話は、もう二度と触れてはいけないと直感的に思いました。母が悲しむため、親戚にも頼めず、私は事故現場を知る術を無くしてしまいました。

子どもにも正しい情報提供を

子どもは自分で現場には行けません。しかし、大人になってから、何年も経過した事故情報を警察に教えてもらえるとは思えません。だから道端に手向けられている花束を時々見かけると、うらやましく思ってしまうのです。道に転がった父の無念を思う時、一度でも、そこでお花を手向け、手を合わせたかったと今も思います。

遺児には、情報のアクセスハンデがあり得ます。さまざまな制約があるかもしれませんが、遺児が望めば、事故後、数年経っていても、正しい事故情報が得られるよう、警察には手だてを検討していただきたいと思います。

恩師の存在、救われた遺児の呪縛

私が遺児になってから５年後の出来事です。当時、私は短大に入ったばかりでしたが、相変わらず「思いやりがない」の言葉で私を支配しようとする母との向き合い方が分からずにいました。周囲の大人に本心を言わないクセがついていたので、「助けて」と言うのはとても勇気がいったはずなのに、その日、児童心理学の試験中、答案用紙の裏面全部に心のうちを書き綴っていました。採点無効になっても仕方がない不器用なやり方でした。そんな突拍子もない学生は、今までいなかったと思います。

でも、先生はそれを読み、研究室で私の話をただ聞いてくださいました。信用できる大人は、ここにいたのです。この世は捨てたもんじゃなかったのです。これにより、それまでどこにも踏み出せないと思っていた私が、やっと外へ踏み出すことができました。卒業後も恩師が 87 歳でお亡くなりになるまで、手紙で近況を伝えあい、時々、夫と共にご自宅に伺ったりもしました。

恩師には、私が 20 歳の頃に母から聞かされた話もしました。「お父さんが亡くなって 1 週間くらいの時、眠っているお前たちの首に手をかけて、一家心中しようとしたことがある」。母にしたら、今だから笑って話せる懐かしい話だったのかもしれませんが、とんでもない、私はとても衝撃を受けました。危うく私たちきょうだいの人生は、寝ている間に母の手によって強制終了されかけました。父により始まり、母によって終わる遺児の人生なんて、とんでもない。もちろん女手一つで育ててもらった恩は深く思っています。でも、そこにある子らの生きる意思を無視した苦労話には、全く笑える要素などありませんでした。親の子殺し未遂なんか聞きたくなかった。

その時受けた衝撃の後遺症からか、私は、自分が母親としての目線で、眠り姫の糸車に似た呪縛に３度かかりました。事故当時の家族の年齢、つまり子ども 13 歳、私 38 歳、夫 45 歳の年のたびに、その１年間だけ何事も起こらないようにとただ真剣に願うのです。そうやって３度目をやり過ごした時、やっと終わったと心の底から安堵したのでした。

本当にばかげた話ですよね。でも恩師は、変わらない温かいまなざしで、「あなたは深い経験をし

ました。そしてよくこれまで生きてきましたね。僕の教師生活の最大の喜びは、教え子にあなたがいたことです」と。その言葉が今も支えになっています。

それまで人と関わるのは面倒ばかりだと思っていた私が、こんな時、先生ならどんな言葉をかけるだろうか。私は信用できる大人になっているかなと思いながら、日々、人との出会いを繰り返しています。

最後に 13 歳の頃の私に、「あれから本当によく頑張ったんだよ。頑張ったね」と、一言ねぎらいの声をかけて、この小さなお話を閉じたいと思います。